

巻 頭 言

林業と自然保護

鳥取大学農学部 大 住 克 博

林業は自然の中の仕事だ…と言うのは、概ね正しいだろう。しかし、林業は自然と向き合ってきた仕事である（だから、自然保護にも関係が深い）…といえるだろうか？ 私は必ずしもそうでは無いと思う。もちろん、林業は多様であり、広い意味では、雑木林での薪の生産や森林エコツーリズムなども含まれる。ここでは混乱を避けるために、スギやヒノキなどの針葉樹を植栽した人工林で丸太を生産するという、狭い意味の林業に絞って話を進めよう。

まず、林業が作り出し相手にしてきた人工林は、自然林からは遠い存在であることを指摘しておきたい。人工林は、その地に存在した植生を排除して、外部から持ち込んだ苗木により木材の生産を行うものであり、むしろ、作物を栽培する農地と類似した存在である。その林業でも、自然保護に配慮するために、スギやヒノキの人工林に広葉樹を混ぜようという試みがなされている。しかし多くの場合、それで人工林をどれほど天然林の生態系に近づけられるのかということは、あまり突き詰めて検討されていないのではないだろうか。類似した農地になぞらえて考えてみれば、作物に雑草を混入させれば自然の生態系が回復する、というような簡単なものではないことは自明だろう。

次に、林業は人里を離れた奥山の自然の中で発生した自給的な生業ではなく、むしろ都市などの消費地の近くで産業として発達してきたという歴史を挙げたい。地理学の古典的なモデルに、チューネンの孤立国というものがある。これは、都市あ

るいは大消費地の周辺では集約的な土地利用、例えば園芸などが行われるが、距離が離れるにつれて、より粗放な土地利用、例えば放牧などに替わっていくというもので、教科書でもよく紹介されるのでご存知の方も多いただろう。この中で、意外なことに林業は都市周辺、あるいは都市に流入する河川周辺に配置されている。このことは、林業がその長い生産期間と高い搬送コスト故に、大きな資本と市場を必要とする都市的な産業であったことを示している。日本の林業の草分けである吉野林業や西川林業も、同様の立地に成立している。もちろん奥山でも木材生産は行われたが、それは天然林の伐採という、自然保護の対極にある略奪的な林業であった。

そもそも林業の歴史は新しい。日本は世界でも早い方だが、それでもようやく18世紀になって一部の地域で始まったと言われている。現在では、ほぼ日本全土に人工林が広がり、一見、林業が普及しているように見えるが、実はその多くは戦後初めて造林した地域であり、林業技術の普及や管理経営思想の成熟はまだまだである。まして、地域で人工林の管理を自然保護とどのように調和させていくかという議論は白紙に近い。これから林業を自然保護に配慮したシステムとして創りだしていかなければならないのだ。しかし、それに対する経験や知識、さらに技術や理念は、林業関係者の間でも十分ではない。広範な市民の議論への参加と支援が必要な理由が、ここにあるといえよう。